

【研究主題】 みんなが主役！笑顔あふれる学校づくり

【副題】 子どもたちが無限に広げる「ボランティア活動」の可能性

【学校・団体名】 滋賀県愛荘町立秦荘西小学校

【役職名・氏名】 校長 田中 幹雄

## 1 はじめに

コロナ禍の様々な教育活動の制限により、本校では、子ども同士の関わりの機会が減り、各学級の孤立化が進んだ。同じような学校は全国にも多いことだろう。とりわけ、コロナ禍3年目の令和4年度は、学級という枠内だけの関係性で過ごす中で、異学年間のトラブルが増え、些細なことでも友達同士の関係が悪化し、トラブルに繋がるケースが多く、教員もその対応に追われた。その結果、児童の発想を取り入れる余裕もなく、問題行動を抑制していくことを優先し、学校全体が「負のスパイラル」に陥ってしまっていたと多くの教員が感じている。ただ、児童の様子を見ていると、自分の思いを形にしたり、チャレンジしたりしたいという思いをもっていることもうかがえた。

そこで、今年度の初め、この負のスパイラルから脱却するために、教員同士で様々な意見を出し合い、子どもたちの声や力を学校運営に生かす方を模索していった。

## 2 プロジェクトの経緯

### (1)当初の教員の思い

**A 教員：**子どもたちは悶々としている。子どもたちの可能性をもっと広げるために、やりたいことを自分で選んだり、判断したりして、どんどんやっていいんだと思えるようにしたい。そして異学年が関わり合いながら、学校のパワーにしたい。

**B 教員：**子どもたち自身が様々な活動について、前年踏襲しか知らない。新しいことをしたいと言う声も聞くが、どうすればいいのかわかっていない。自分の思いを大切に行動できるよう、子どもたちを応援したい。

**C 教員：**自分たちの学校を、自分たちで過ごしやすく、変えることができることを知ってほしい。そのためにまず、誰もが気軽に取り組めるボランティア活動で学校を変えていってはどうだろうか。誰かのために頑張ることって「気持ちいい」という経験を多くの子にもらいたい。

教員にも、今の本校の現状を変えていかなければならないという強い危機感と本校児童がもつ力への期待感があり、議論や話し合いを重ねる度に、児童の自主性と行動力を高め、「子どもが主人公の活気ある学校を取り戻したい」という思いが高まっていた。

### (2)活動のきっかけ

4月当初、雨の日の休み時間に校舎内を走る児童が多く、けがが起こりやすい状況ができていた。教員がその都度、注意をするが現状が変わらずに困っていたところ、6名の6年生児童が、その危険性を危ぶみ、「声をかけて回ろう！」と言って廊下歩行を呼びかけ始めた。廊下を走ることへの危険性に対する課題意識、それに対する自発的な行動。本校の児童がもつ力、その可能性を感じた出来事であった。そして、さらに児童のもつ力を引き出すために、学校の課題であった、「雨の日の安全な休み時間の過ごし方」について、最高学年の6年生に相談してみようと試みた。その結果、6年生からは、雨の日に安全に楽しく過ごすアイデアがたくさん出た。その中で特に私たち教員を驚かせたのは、「雨の日にみんなで集い、楽しく過ごすことのできる部屋をつくる」という案だ。子どもの柔軟で奇抜な発想に感銘を受け、この案を実現するため、有志を募り、プロジェクトとして動かしていくこととなった。ここで、「雨の日プロジェクト」という有志で行うボランティア活動が6年生から始まった。

### (3)ボランティア活動を進める児童からヒントを得る

「雨の日プロジェクト」に集まった有志メンバーの活躍は見事であった。自分たちで休み時間に自主的に集まり、空き教室を集いの場にするための計画を立て、必要な物の交渉や空き教室のリフォームまですべて子どもたちの手で行い、早期にプロジェクトが実現した。充実感に満ちたプロジェクトメンバーの姿から、誰かのた



めに自主的に活動するボランティア活動で学校全体を活性化させたいという教員の思いが高まった。

### 3 取組について

#### (1) ボランティア活動の魅力

雨の日プロジェクトで目を輝かせながら活動する児童の姿から、ボランティア活動には以下のような魅力があると実感した。

- ① 自分の思いややりたいことが形にできる
- ② 同じ思いの仲間と活動し、居場所ができる
- ③ 思いが実現すると、誰かの笑顔につながる
- ④ 上記の経験を通して自己有用感が高まる

このような魅力あるボランティア活動を推進し、多くの笑顔を学校に生み出すため、ボランティア活動のシステム化を進めることにした。

#### (2) ボランティア活動のシステム化

①これまで無意識に行っていた奉仕活動や人のためになる行動を可視化する、②ボランティア活動をみんなで決めた学校スローガン「やさしく たくましく 笑顔あふれる 秦西小」につなげる、という2つの目的をもち、システム化を検討。その結果、ボランティア活動を行うごとに自分の活動を「見える化」できる**スタンプカードを作成**し、その表紙には学校スローガンを掲げ、活動の積み重ねでスローガンを実現する意味を加えることにした。本校は児童がぶどうを育て地域や姉妹校と交流を深めるという伝統があったため、このスタンプをグレープポイントとして周知し運用した。このスタンプは学校長から直接押してもらうこととし、各教員がボランティア活動実施に応じてグレープポイント引き替えカードを配り、子どもたちは休み時間に校長室を訪ね、スタンプを押してもらっている。校長室に入り、校長先生から「ありがとうございます」の言葉とともに、優しさの証としてのグレープポイント（スタンプ）を押してもらうことで、意識高く次の活動に向かっている。



また、スタンプカードは、**全校配布をせずに**、ボランティア活動を行った児童にのみ配布していった。ボ

ランティア活動の自発的な側面を大切にできなかったからである。その結果、草の根的にボランティア活動が広がっていった。現在もスタンプカードの配布数をチェックし、ボランティア活動の広がり具合を定点観測している。

### 4 児童が取り組むボランティア活動の紹介

#### (1) 雨の日プロジェクト

雨の日に校舎内を走り回る児童が多いことから、空き教室を利用して雨の日にのみオープンする「レインデーハウス」を企画・運営している。どうすれば児童が利用しやすく、たくさん集まってくれるか、また、運営方法やディスプレイなど、休み時間に集まって計画を練る中で学級という枠を越えた多くの新しい関わりが生まれた。そして、オープン後の雨の日は多くの児童が集まり学年を越えた交流の場となっている。



#### (2) ぶどう復活プロジェクト

コロナ禍で中止になっていた本校伝統のぶどう栽培を復活させたいと集まった23名の児童と地域の方がタッグを組んで取り組んでいる。ぶどう園の草刈りや、袋かけ、観察など年間を通して取り組みを続けている。ぶどうの栽培や管理は難しく、子どもの力では難しい作業もあるが、子どもたちの一生懸命な姿やぶどうの復活を願い自主的に取り組んでいる様子が地域の方に伝わり、地域の方も積極的に管理に関わっていただいている。第1回のぶどう園除草作業には、多くの地域の方にも来ていただき、子どもたちと一緒に作業してもらった。「子どもたちが、伝統のぶどうを復活するために行動してくれたので、うれしいんや。私たちも手伝いたい」と言っていた地域の方のように、このぶどう復活プロジェクトは、学校と地域とをつなぐ活動となっている。



### (3) 清掃活動

本校の運動場は放課後や休日は解放しており、多くの子どもたちや地域の方が利用している。しかし、ゴミが持ち帰られずに散乱していることが多い。そのため、子どもたちは休み時間や放課後に児童が自主的に拾ったゴミを職員室に届けてくれることが多々あった。このような取り組みにもグレープポイントを渡し、頑張りを周知していくと、共に取り組む児童が増えていった。他にも、学校と地域をつないでいる正門を休み時間に自主的に掃除する子も現れるなど、学校をきれいに、そして良くしていこうという動きが広がっていた。



### (4) 挨拶ボランティア

挨拶運動は、これまで運営委員会が取り組んでいた。そこに、一緒に挨拶を行う児童が自然に現れたことで、運営委員会の児童が、誰もが参加できるように呼びかけのプラカードをたくさん作り、「挨拶ボランティア」に参加したい児童に配れるように準備を行った。その結果、様々な学年の児童が挨拶運動に参加し、朝の校門前は元気な挨拶が飛び交うようになった。地域の方からも今年は子どもたちの挨拶が元気になり気持ちいいという声をいただいている。

### (5) 学校スローガン作成

「こんな学校をつくりたい」という児童の思いを大切にするため、学校スローガンを児童が自治的につくることにした。まず全校児童にスローガンの募集を行い、運営委員会で候補を絞り、全校投票を行った。その結果、本年度「やさしく たくましく 笑顔あふれる 秦西小」に決定。そしてみんなで決めた学校スローガンを校内外に知らせていこうと、スローガン掲示ボランティアを募ったところ、1年生から6年生の有志が22名集まった。休み時間に図工室に集まり、スローガンを画用紙に書き、思い思いの絵も描いて、元気の出るスローガンが完成した。活動の中では、自然と異学年交流が生まれ、楽しく協力し合いながら一生懸命書き上げる姿が見られた。完成したスローガンは、正門前の窓に貼りだした。毎朝登校してくると、子どもたちが決め、子どもたちが作成したスローガンを目にするのができ、学校の一体感が高まっている。



### (6) 夏休みのくらし方伝え隊

本年度は、これまで校内放送で行っていた終業式を、全校のつながりを意識できるように一斉に体育館に集めて行った。その際、夏休みに全校児童が安全に過ごすために大切なことを、子どもたち自身で伝えてほしいと思い、「夏休みのくらし伝え隊」のボランティア募集を行った。すると、6年生と4年生から8名の児童が手を挙げてくれた。休み時間を使って伝える内容を整理し、劇やクイズの練習を行った。終業式ではステージ上で大変わかりやすく、また、楽しく安全なくらし方について伝えてくれた。全校児童も興味津々で発表を聞いていた。反響は大きく、次回は参加したいという声をたくさんもらっている。今回発表した児童も全員が再度やってみたいという思いをもっている。



## 5 広報活動

子どもたちのこのような温かい行動を学校 HP や町の広報、マスメディアにより地域、保護者に発信し、学校から笑顔を発信すると共に、学校への信頼と期待を大きくすることに努めている。



広報を行った結果、各家庭で、ボランティア活動が話題に上ることが増え、地域の方の耳にも届くようになった。保護者や地域の方から「この子のこんな姿を見たことがない」「元気をもらえる」「応援したくなる」

「学校が良い方向に向かっていることを感じる」「子どもたちが生き生きしている」と言った前向きな言葉をたくさんいただくようになった。子どもたちの自主的なボランティア活動が学校だけでなく、地域も明るくしていることは、予想外の大きな喜びである。

## 6 ボランティア活動の効果

### (1) 児童アンケート結果より

子どもたちがボランティア活動を進めていくことでどのような効果が出るのかを調査するため、定期的に児童アンケートを行っている。児童アンケートをとった結果、「よくあてはまる」「あてはまる」と答えた割合は以下の通りである。

児童アンケート

設問	5月	7月
他の人のためになることをやっているか	77%	81%
友達と協力して何かに取り組んでいるか	74%	81%
地域の人と一緒に何かをすることがあるか	51%	58%
やさしくたくましく笑顔あふれる秦西小になっていると思うか	76%	84%

短期間ではあるが、多くの設問で肯定的な答えが微増し、学校全体にボランティア活動が浸透し始め全校で決めたスローガンの実現に向けて近づいていると手応えを感じている。また、ボランティア活動に参加した児童（スタンプカードを使っている児童）の人数と割合は以下の通りである。

ボランティア実施児童数の推移（全校児童数251人）

	5月	6月	7月
人数	28人	75人	120人
割合	11%	30%	48%

ボランティア活動に参加したいと考える児童が増え、1学期終了時点でおよそ半数の児童が実際にボランティア活動を行っている。友達が生き生きとボランティア活動をしている様子を見て、人のために行動することの良さを感じ、自らも行動したいと考え広がりを見せていった結果であり、この活動が子どもたちの意思で自然に増えていった結果に職員みんな喜んでる。

### (2) 実践による声

このボランティア活動の仕組みを作り、子どもたちが実行し始めてから、学級や学年を越えて、同じ思い、目標をもつ子どもたちがつながる場が多くなった。特にみんなのために頑張る高学年の姿が、下級生のあこがれとなり、「みんなのために頑張ることは素敵なこと」という新たな価値観が広がっている。

### 【ボランティア活動に参加した児童の感想】

雨の日プロジェクトの立ち上げから活動に参加しています。部屋のレイアウトや遊び道具、運営の方法まで全てメンバーのみんなと協力して決めて準備を進めました。オープン当日、たくさんの子が遊びに来てくれ、楽しそうに過ごしてくれました。自分たちが一生懸命考え、準備してきたことが形になったことがとてもうれしかったです。

またこのような子どもたちの姿は、地域の人も元気にしている。

### 【学校運営協議会委員 大辻さんの声】

この取組が始まってから、子どもたちの顔が生き生きとしており、学校全体の勢いが違うのを肌で感じます。これまで気づけなかった、子どもたちの「人のため、学校のために」という思いや姿をたくさん見ることができてとてもうれしいです。共に活動する中で、地域の方は子どもたちが一生懸命頑張る姿に大変喜んでおり、学校のためにという思いで地域の方同士でつながり合いが生まれています。今度は地域発信型で学校と共にボランティア活動を進めていきたいと考えています。生涯学習の視点から、この活動は子どもたちが活躍する場がたくさん生まれ、生きる力を発揮し、人材育成にもつながっていると感じます。



## 7 おわりに

始動から3ヶ月という短い間ながら、児童の生き生きと活動する様子が多く見られ、また、学校全体が元気に活気づいている様子を学校の内外から感じ取ることができている。場とシステムを整えるだけで、子どもたちの声が子どもたちの責任の下で実現していき、これまで隠れていた子どもたちの力がどんどんと発揮されるようになった。その結果、児童の笑顔は、学校だけでなく地域をも明るくしている。

まだまだこの仕組みを活用していけば子どもたちの活躍の機会が増え、学校全体の教育力が向上する可能性で満ちあふれている。大切なことは児童のやる気に火をつけ、それを形にする応援をすることだと考える。この活動が進んでいけば行くほど、「ありがとう」の言葉と全校の「笑顔」が最高のご褒美となり、優しさいっぱい为学校になっていくようになるであろう。そうなるために今後も継続、発展できるよう努めてきたい。

(執筆責任者 教諭 国寄 智将)